現代人文社
900円

メディア規制に対抗できるぞ！報道評議会

浅野健一（大学文学部教授）著

メディア規制の動きに対し、「表現の自由」「知る権利」を標榜して、規制に反対するメディアへの市民の支持は、全国的な盛り上がりを欠いているように思う。その背景には、メディアの過度の取材への反感、実名報道・誤報・虚報などによる深刻な報道被害が大きな要因としてあるのではないだろうか。自殺者まで出たという深刻な報道被害については、著者の『犯罪報道の犯罪』（講談社文庫）に詳しい。しかし、メディアを規制すればそれでよしとするのは問題である。本書は分かりにくい「メディア規制法」の真の問題点を見事に解明している。メディアの責任はもちろんであるが、メディア規制反対運動の問題点も挙げていて、メディアを熟知している著者の面目躍如の観がある。最も素晴らしいのは、報道評議会の設置、匿名報道、そして記者クラブを解体してプレスセンターを設置するなど、メディア規制に対抗できる具体的な提案を示していることである。いずれも著者の長年の提案であり、先見性に驚かされる。松本サリン事件で犯人扱いされた第一通報者、沖縄のレイプ被害者など多数の報道被害者への支援を惜しまず、不正に対して長年闘ってきた著者の信念と情熱があって初めて可能な高度な入門書である。巻末のアンケートにも、事実を重視する著者のジャーナリストとしての良心が感じられ、日本社会をよりよくしたいと考える全ての人に薦めたい。

栗木千恵子（中部大学助教授）

晃洋書房
4,800円

同志社大学人文科学研究所研究叢書35
新島襄全集を読む

伊藤彌彦（大学法学部教授）編

本書は北垣宗治編『新島襄の世界―永眠百年の時点から』（一九九〇）、同志社編『新島襄―近代日本の先覚者』（一九九三）に次ぐ三冊目の新島襄研究論集である。その特色は『新島襄全集』の全巻を資料として縦横に用いて書かれた最初の論文集であることだろう。

編者の伊藤彌彦教授は序論で本書の意図を述べ、各論文の内容を的確に要約している。加えて本井康博「新島研究の歴史と現状―『新島学』の構築にむけて」は、新島研究の歴史を批判的に概括した見事な論考であり、本書の序章としてふさわしい。『全集』の刊行がまさしく新島研究の第三世代をして、誰はばかることなく「新島学」を追求することを可能にしたという事情を明快に説明している。

高久嶺之介「新島襄と北垣国道」は新島の大学設置運動との関連で従来過小評価されていた北垣知事の役割を再評価することに成功している。太田雅夫「新島襄と家永豊吉」は熊本から来た秀才の暴れん坊だった家永と新島の関係を論じた論文であり、同志社人としては最初に早稲田に籍をおいた国際人家永に、新島との関係に特定して光を当てた。田中真人「旅をする新島襄」は旅人としての新島に焦点を合わせた論考で、彼の生き方がこの面から見てもユニークだったことを明らかにした。

本書の中の他の諸論文を含めて、「新島学」が着実に前進しつつあることは慶賀に堪えない。

北垣宗治（敬和学園大学長）

（他に、西田毅大学教授、坂本清音、宮澤正典女子大学特任教授、森一郎女子中・高教諭、竹山幸男中学校教諭が執筆）

晃洋書房
4,200円

新島襄と徳富蘇峰

本井康博（大学文学部嘱託講師）著

多年にわたる本井康博氏の新島襄研究の蓄積の一部が今回、一冊にまとまった。本校開学の祖にたいする研究姿勢を「顕彰」から「検証」へ回転させた本書は、学問としての新島研究に飛躍をもたらす一書といえる。

著者の関心を一言でいえば、新島襄をめぐる「人間交流」の追跡にある。あたかも警視庁特捜部が「アシ」を採るように、人間関係の足跡を追う。丹念にまた複数の資料・情報の矛盾点に着目し、仮説的推理を交えながら分析し、一番確率の高いところに結論づけていく。精緻な資料探求にもとづく実証的研究である。宣教師文書を使用するなど新情報も多い。

新島襄との関連で取り上げられたのは、人物としては、徳富蘇峰、大久保真次郎、熊本バンド（市原盛宏、浮田和民など）、福沢諭吉、中江兆民などであり、事件としては「自責の杖」事件、知育徳育論争（大久保派と同心交社）、教会合同問題などである。

一番の力作は、第一章で、市原盛宏対徳富蘇峰という図式のもと、「自責の杖」事件の真相を暴いた分析は評者にはきわめて説得的であった。また、大久保真次郎と娘久布白落実との人間描写など多くの新事実が紹介されている。それらの結果として人間新島襄のスケールの大きさが時代のなかから浮かび上がってくる。なお本書は徳富基金の助成を受けて出版された。これを機に本井氏の他の論稿の刊行実現を願ってやまない。

伊藤彌彦（大学法学部教授）

白帝社
1,400円

戦前同志社の台湾留学生―キリスト教国際主義の源流をたどる

阪口直樹（大学言語文化教育研究センター教授）著

本書によれば、戦前の同志社の学籍簿には千四百六十四人もの留学生の名前が見られ、その内の七百十四人が台湾からの留学生であったという。そうした数的データの確認作業に続いて行われた追跡調査を基に、著者は、植民地台湾の不平等な教育制度を背景に数多くの若者（概して裕福な層の出身者）が高等教育の機会を求めて日本に留学したこと、そうした台湾留学生の受け入れ先として同志社は重要拠点の一つであったが、その背景には確固としたローカルエリートのネットワークが存在していたこと、そして戦前同志社の台湾留学生の中からはその後の台湾史に名を残すことになった各界のエリートが数多く輩出されたことなどを詳細に記述している。実は、このような植民地エリートの日本留学というテーマは従来の台湾近代史研究においてほとんど未開拓の領域であり、まずこの点において本書の試みは大きな意義をもっている。

さらに、こうした作業を通じて著者は、戦前同志社の台湾留学生たちの人生史に同志社特有の「キリスト教国際主義」が大いに反映されていたことを確認し、最後に従来アメリカにのみ求められてきた同志社におけるキリスト教国際主義の源流を戦前の台湾や朝鮮（韓国）にも求められるべき根拠が得られたと結んでいる。このように本書の試みは、単に台湾近代史研究としてだけでなく、同志社史研究としても新たな展開の可能性を示す有意義なものである。

河口充勇（大学大学院文学研究科）

萌書房
2,200円

ミニマ・フィロソフィア

庭田茂吉（大学文学部助教授）著

本書は、著者が「晩年学フォーラム」の通信誌に折りにふれて書き綴ってきた文章を集めた哲学的エッセイ集である。そこに収められた文章の主題は様々であるが、そうした様々な主題を貫く著者の姿勢は一貫しており、著者はそこで日常の中で哲学すること、より正確には、哲学の母体である日常の生（生活、人生、生命）に目を向け、それを考え抜くことを実践しているのである。本書は、日常に転がる哲学的発想の種と、その発想の豊かな展開の可能性を私たちに示唆してくれるという点で、ある一つの解釈の主張を主眼とする哲学論文よりも、私たちを「自由に考えること」へと誘い入れてくれる。本書を読みつつ、読者は、著者の思考を借りながら、自らの「哲学」、自らの「思想」を様々な形で展開することができるであろう。

また、評者がとりわけ本書から嗅ぎ取ったのは、その独特な「死の匂い」であった。ここでは、死、孤独、隠退、老い、疲労、喪失などという主題が、単に悲観的にでも、また、妙に楽観的にでもなく、むしろ、それらを素直に受け入れる態度で扱われているのであり、一般には否定的に理解される主題が、私たちの生の奥深くで感じられる一つの懐かしい匂いとして、人生の幼なじみとして描き出されているのである。評者は、そうした著者の「死の世界」にある不思議な居心地のよさを感じた。忘れていた土と草の匂いがふと蘇ってきたようであった。

川瀬雅也（日本学術振興会特別研究員）

教文館
2,500円

神のドラマトゥルギー

小原克博（大学神学部助教授）著

たとえ旧約聖書や新約聖書やコーランにおいて神の言葉が啓示されなくとも、人間は神について考えることが出来るだろうか。明らかに古代のギリシャ人は、神の言葉が啓示される以前に、神について深く哲学することが出来たし、未だに神の言葉が啓示されているか否か疑わしいインド以東のアジア人もまた、神について考えて来なかったわけではない。ここに特定の神の啓示とは差し当たり独立の神についての言説、いわゆる自然神学、哲学的神学、普遍神学、一般宗教学等の存立する可能性がある。カール・バルトの峻拒したこの自然神学の可能性をドイツ・プロテスタンティズムの文脈において擁護した、ヴォルフハルト・パネンベルクの浩瀚（こうかん）な著述をコンパクトに整理したのが本書の第一部である。現代プロテスタント神学のリベラルさが小気味よく伝わって来る。

本書の白眉は、キリスト教の根本教理である三位一体論を現代のレトリック理論によって読み解こうと試みる第四章である。自然神学から出発しつつ三位一体を語る大胆さといい、伝統的な教理を最新のレトリック論で解釈しようとする斬新さといい、著者の面目躍如であろう。評者としては、オイコノミア的（経綸的）三位一体論における聖霊の位置付けに異論もあり、また三位一体論の解釈に（数学の）集合論を援用する僕自身の方法もあり、著者と大いに議論を交わしたいところである。

なお本書の第二部は、神学的な身体論が展開されており、その生命倫理や環境倫理への適用可能性が示唆されている。

落合仁司（大学経済学部教授）

白水社
2,800円

古墳の思想——象徴のアルケオロジー

辰巳和弘（大学歴史資料館助教授）著

「古墳は墓である。……宗教的・精神的・思想的な属性を強く具有した工作物である」

著者はこの本をこう書きおこし、書きおさめる。「なぜ、当たり前のことを」といぶかる人もあろうが、学界の議論をみると、長らく古墳は墓ではなかった。「王権継承儀礼の場」であり、「ヤマト王権下の身分秩序を表す政治的工作物」なのだ。

政治主義的な考古学は、もちろん、輝かしい成果をあげたけれど、半面、古代人の心性をないがしろにした点は否めない。著者は、そうした学界の潮流に率先異議を唱え、森浩一先生直伝の総合的な古代学の方法で古代的精神の解明に挑み、ついに学界の流れを変えた。

「古代人の心意を聞け」と、いち早く説いたのは、もう一人の恩師・三品彰英先生である。著者は、前方後円墳の奇妙なかたちに、古代人のこころを探った結果、「前方後円墳の平面形と側面観は壷だ」とする先師の「壷形説」にたどりつく。さらに師説を乗り越えて、「壷形の前方後円墳は、不老長寿の神仙たちが棲む、壷形の蓬莱山を象徴する」と説く。

書名の「古墳の思想」とは、つまり仏教以前の外来信仰「神仙思想」を核とする他界観だ。それを媒介にして古墳文化の諸相を解き明かしたうえ、神仙界への憧憬が弥生時代から飛鳥時代に及ぶことを、最近の新発見から絵解いてみせる。目から鱗のスリリングな力作である。

岡本健一（京都学園大学教授）

晃洋書房
2,800円

ローマと地中海世界の展開

浅香正（大学名誉教授）監修
中井義明（大学文学部教授）、太田信幸（女子中高教諭）、岩崎努（大学大学院博士後期課程）ほか著

本書は、浅香正同志社大学名誉教授の喜寿を記念して出版された論文集である。全体は五章に分かれ、第一章「ローマ世界の諸相」、第二章「ローマ都市ポンペイ」、第三章「ローマ世界の変貌」、第四章「古代末期と聖人伝説」、第五章「地中海諸地域の歴史」という構成をとっている。巻頭を飾るのは、ユーラシア大陸における東西交流をローマ側から捉えなおす、氏自らの論考である。以下、氏が主催し、現在も中井義明同志社大学教授の下で継承されている屈州研究会や、一九八〇年代末からのポンペイ遺跡の現地調査など、氏の長い古代ローマ史研究の道程において薫陶を受けた各分野の専門家が寄稿している。

したがって本書は、「地中海世界の展開」という表題が示すとおり、テーマとしてはローマ史のみならず、ギリシア史、エジプト史、ビザンツ史など極めて多彩、かつ地域はブリテン島から西アジアやインドにおよび、時代は紀元前三〇〇〇年から紀元後一〇世紀までと、幅広い。論点もまた多彩であり、文献史学に加え、考古学、美術史、建築学といった様々な角度からのアプローチが行われている。古代ギリシア・ローマに限定されず、地中海世界全体の歴史を巨視的に眺められる、稀にみる論文集となっている。本書の最大の特色は、まさにこの点にあり、浅香名誉教授の永年の業績を頌える格好の論文集である。

桑山由文（兵庫教育大学助手）

第三文明社
2,500円

市民社会と情報変革

渡辺武達（大学文学部教授）著

「ふつうの人間が物理的に・精神的に、差別することもされることもなく自主的・自立的に暮らせる、国境を横断した地球的規模の平和な人間社会のことである。」

これは著者による「市民社会」定義である。私はこの著作を市民外交論についての文脈で読むと同時に、著者が同志社大学という人的環境の中でどのようにこの論理を育てたのかという伝記的な興味をもって読むことができた。

「市民外交論」を支えているものは、大学院時代にイングリッシュ・ライティングの著書をもっているほどの非凡な語学能力にある。また、彼のグローバリズムは、当時無視されてきたアジア、アフリカを先駆的に注目してきたことで、独自のアングルを持つ。

もしあなたがセイシェルという国名を知っていたとしたら、彼がそこに一役買っているのを発見するだろう。

この本は、「市民外交の可能性」を軸に「市民外交の言語メディア」において、コミュニケーションの道具としての言語論を展開する。彼はかつて「ジャパリッシュ」を造語し、「正しい」英語に対して伝わる英語としてのジャパリッシュを提唱したが、それは普通の市民レベルでの外交の可能性を示唆したものである。

彼の市民外交論は自ら携わったピンポン外交に見られるように多様で現実的な可能性を秘めた世界であり、国家を超えた人々の連帯を見せる世界である。

山口功二（大学文学部教授）

藤原書店
4,200円

世界経済史の方法と展開
―経済史の新しいパラダイム（1820-1914年）―

入江節次郎（大学名誉教授）著

本書は、著者の長年にわたるライフワークの成果である。著者の基本的スタンスは、「世界資本主義」あるいは「世界経済史」である。すなわち、商品経済の社会的分業が成立する場は、世界経済においてであり、世界経済こそが主体的な範疇なのである。こうした世界資本主義が成立した時期を一八二〇年代とし、それ以降およそ百年間の世界経済の歴史的変遷を、イギリスを中心に三つの時代に区分し、分析している。

第Ⅰ期は、綿工業が主導産業になる時代（一八二〇-五〇年）である。ランカシアの綿製品が技術的生産力優位のもとで世界市場向けに生産された。またこの時代にはロンドンを中心とする世界金融市場が成立したことも特筆に値する。次に第Ⅱ期は、鉄工業が主導産業となる時代（一八五〇-七〇年）である。この時期には鉄道建設が世界的な規模で推進され、鉄材需要が世界的に急増したのである。第Ⅲ期は、重工業が主導産業となる時代（一八七〇-一九一四年）である。この時期には、主導産業が鉄から鋼に移行すると同時に、非鉄金属業や化学工業が成立する。著者はまた、この第Ⅲ期を世界資本主義が「帝国主義」段階に移行し、その裏面として「南北問題」が発生した時代であることも強調している。

最後に本書は、世界経済の現況や未来にも示唆を与えている。

布留川正博（大学経済学部教授）

東洋経済新報社
1,800円

ハードランディングを求める日本経済

鹿野嘉昭（大学経済学部教授）著

刺激的なタイトルである。ハードランディングは、誰もが避けたいシナリオだ。しかし、著者は「新しい社会を築き上げていく過程においては、ある種の痛みは『産みの苦しみ』としてさけることができない」としている。

本書では、日本経済を再生させるのに必要な三つの政策課題が議論されている。一つ目は不良債権問題を中心とする金融システムの問題、二つ目は公的医療保険や介護保険などの医療制度の問題、三つ目は国と地方の税制の問題である。

不良債権問題については、会計制度や監査制度を充実し、問題企業の再建や整理を進め、銀行には経営者・株主の双方に責任を求めた上で、公的資金の注入が必要としている。

医療制度については、規制緩和と競争原理の導入を両輪として、この分野におけるサービスの提供者と需要者の関係を変革することを求めている。そして税制については、税体系を根本的に改め、納税者が政府を監視できる仕組みを作ることを提案している。

いずれも「公正で透明な市場メカニズムを構築せよ」という著者の一貫した主張が貫かれており、荒療治に見える提案も、原則から導き出された必然的な帰結であることが分かる。現状への厳しい提案は、日本経済の未来に対する著者の強い憂慮の念から出てきたものであろう。今の日本経済にとって、いずれも重要な問題が議論されている。

北坂真一（大学経済学部教授）

有斐閣
6,000円

同志社大学経済学研究叢書6 加速償却の研究

小森瞭一（大学経済学部教授）著

ある特定の事項や事象は視角次第でいくつもの学問の対象となりうる。「減価償却」は通常会計学の守備範囲に属すると理解されがちであるが、アメリカの減価償却制度が確定決算主義を採用していないところに着眼すると、税法上の伸縮的な財政政策手段としてのその活用が開けてくる。

本書は、著者がこうした観点から戦後アメリカの加速償却制度を投資刺激政策（景気政策や経済成長政策の手段）として貢献すべきものと位置づけ、長年にわたる研究をまとめ上げた労作である。加速償却法の採択をはじめ、ほぼ十年おきに現れた耐用年数の短縮といった各章を構成する法律的、制度的諸変革の画期的効果がさしずめ強調され、期待されたが、現実の減価償却に影響を及ぼした諸構成因子の効果の同一スケールでの計数的推定で期待が欺かれたことを確認し、ついには投資刺激の可及的追求と原価という宿命の上限をもつ選択肢の経済政策手段としての使用との間に確然とした衝突をみる著者の考察は、たとえその帰結が積極的主張ではないにせよ、研究のきわめて少ないこの分野では、貴重で価値あるものとみられる。

程度は少し高いが、読者は投資刺激政策の展開過程に過渡的段階、完成段階、不十分性暴露段階というような区画を想定して対処すれば、シェイクスピアの『マクベス』とまではいかないが、興味をもって読めると信ずるものである。

西川宏（大学経済学部教授）

晃洋書房
4,800円

自然との和解の美学—序説

村田誠一（大学文学部教授）著

本書は晃洋書房の世界思想叢書の一冊であり、副題に「西洋近代美学における芸術と自然」とある。主としてドイツを中心として、西洋近代の美学芸術理論のうちに「自然との和解」の理念を探ろうとしたものである。その際本書の独自の視点は、自然の概念を「外なる自然」としてだけでなく、感情や衝動などのわれわれの「内なる自然」とも解し、芸術と自然との関係を、精神と内外の自然との和解の契機を含む関係として捉えるという点にある。これは芸術が自然を模倣するとか、逆に芸術家のこころに想い描かれた理念的自然を芸術が表現するとかという単純な関係ではない。精神と自然との分裂という近代の人間の精神的状況に照らして、崇高の場合のように不快や恐怖、戦慄といった本質的に否定的な契機を含みながら、なおかつ内外の自然との和解の契機を含む重層的な関係として捉え直されねばならないという主張である。自然との共生のルーツともいうべきこの思想が、カント、シラー、アドルノなどの美学理論のうちにすでに含まれていたことを論証しようとするものである。その意味で本書はたんに美学理論としてだけでなく、広く自然保護や環境問題に関しても示唆的な文献と言えよう。

シュペネマン　クラウス（大学文学部教授）

筑摩書房
840円

とびきりお茶目な英文学入門

テランス・ディックス著
尾崎寔（女子大学学芸学部教授）訳

『とびきりお茶目なイギリス文学史——アメリカのおまけつき』（一九九四年発行）の文庫版として改訂出版された本書は、ユーモアと諧謔を駆使して英文学を語る、魅力満載の読み物である。大作家の猥雑な人間模様を面白おかしく伝えつつ、著者の鋭い眼は物事の本質をとらえ、それぞれの作家が背負った人生の重みを実感させるとともに、へこたれない生き方を読者に示してくれる。

さて「文庫版訳者あとがき」に言及されている、尾崎氏自身の英文学への「思い入れ」が、本書の魅力を倍加していることは間違いない。非常にこなれた訳文であることはもちろん、いきなり「序」の部分で、「浜の真砂は尽きるとも、書の刊行に終わりなし」と歌舞伎の台詞がもじられることからも分かるように、原著の意をくみつつ、大胆かつ細心に訳出されており、随所に訳者のこだわりとセンスが感じられる。とりわけ、原著に散在する英語の押韻を生かしつつ、日本語で見事に語呂合わせされていることに驚いた。

名だたる作家たちの人と作品を素材として、著者ディックス氏が腕をふるった個性豊かな新作料理が、尾崎氏の「思い入れ」によって味わいを深め、日本人向きの絶妙のひと皿に仕上がっている、といえるだろう。一般読者だけでなく、専門家にとっても得るところが多い。「くろうと仕事」と呼ぶにふさわしい、立派な翻訳書である。

小山薫（女子大学学芸学部助教授）

『新島襄』（翻刻版）

岡本清一著
編集・解説　太田雅夫
（元桃山学院短期大学学長／一九五四年大学法学部卒／岡本ゼミ）
青山社刊　一五〇〇円

政治学者で元同志社大学教授の故岡本清一氏が、GHQ日本占領下の一九四八年に、「銀の鈴文庫」（広島図書刊）の一冊として執筆した「新島襄伝」の翻刻版。一九五二年に同志社大学出版部から改訂版が出され版を重ねたが、改訂第十版（一九九五年）で絶版となっていた。二〇〇二年四月、氏の没後一周年を記念して、卒業生の手で五十四年ぶりに復刊された。

本書には、キリスト教主義の大学、同志社設立に命を賭した新島襄の人となりと、その生涯を紹介することを通して、「人間のほんとの偉さ」を伝え、少年少女の心が美しく成長するようにとの著者の希（ねが）いが込められている。また、維新後の新生日本にかける新島の思いに、戦後復興の日本にかける著者の思いが重ねられた、全体に優しい語り口調の詩情豊かな名文は、年齢を問わず読む者に感動を与える。復刊にあたり最新の新島襄研究の成果による補訂を加え、略年譜、解説等を付す。装丁・口絵（共にカラー）・挿絵も復元した美しい本である。

『沈黙と抵抗――ある知識人の生涯、評伝・住谷悦治』

田中秀臣著
藤原書店　二八〇〇円

住谷悦治（一八九五―一九八七）は、戦前・戦中のファシズムの抑圧に学問的良心をかけて抵抗し、失職と拷問の苦難に耐えて節操を曲げなかった人である。戦後同志社に復職した後は「教えるとは希望を語ること。学ぶとは真実を胸に刻むこと」の教育信条そのままに、経済学の講義の折節に人生や未来への夢を語り、平和と民主主義の尊さを説いて学生に深い感動を与えた。後年総長に就任したとき、人々は敬愛をこめて住谷を京都の良識を代表する「大学の顔」と呼んだ。本書は日本経済学史研究の第一線で活躍する気鋭の筆者が、社会的課題の実践の中で研究を深め、その成果の実践による社会への還元こそが研究者の使命、と考えた住谷の志に深く感銘し、その姿勢で大正から昭和への激動の時代を誠実に生き抜いた住谷の生涯と思想を、綿密な調査をもとに書き上げた優れた評伝である。

これからの厳しい時代を良心に従って誠実に生きようとする人々にとって、こうした住谷の生涯は時代や思想の相異を超えて、大きな励ましと示唆を与えてくれるに違いない。

島　一郎（大学経済学部教授）

高校倫理の教科書に初めて新島襄が登場

これまで新島襄は高校の日本史の教科書にのみ登場し、「新島襄の同志社」或いは「同志社を創設した新島襄」という簡単な叙述にとどまっていた。従って高校生（受験生）は新島と同志社を結びつけて覚えていても、彼がどのような思想と行動の持ち主であるかを知ることができなかった。

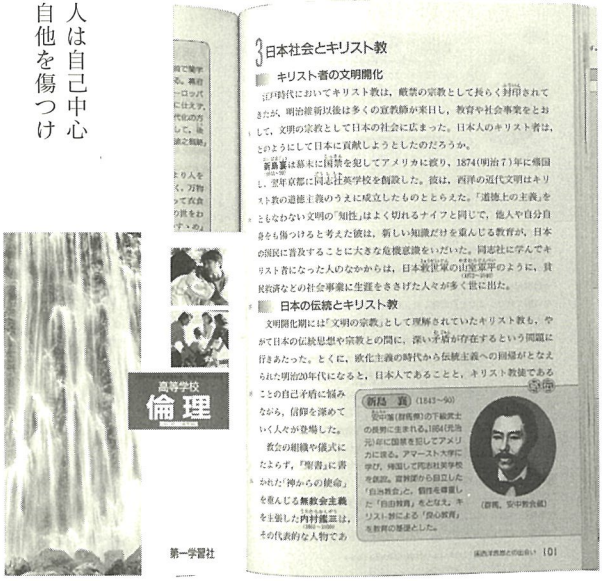
今回二〇〇三年度版『高等学校倫理』（第一学習社）に初めて新島襄の思想と略歴が載ることになった。大学文学部の沖田行司教授（日本教育思想史）は執筆者として新島の倫理思想の現代的意義を他の執筆者に説得し、総ページ数に制限がある中で他の文章を削って空間をつくり、高校生に新島の倫理思想の骨子を簡潔に説いている。

新島は一八七二（明治五）年、岩倉使節団の田中不二麿文部理事官と近代国家に必要な国民教育について議論している。沖田教授は新島のいう「鋭い知性は鋭いナイフのようになる」という個所を引用しつつキリスト教による徳育の必要性を強調する。新島は田中に次のように主張している。「個人が良き市民になるためには、知性的でなければならないが、知性は道徳的に自己を制することはできない。知性のみで道徳原理をもたなければ、彼は隣人や社会に善を行うよりも害を及ぼすであろう。彼の鋭い知性は鋭いナイフのようになるだろう。彼は隣人を破滅させるだけでなく、自身をも滅ぼすであろう。そのような破滅をきたす知性を抑える道徳原理が存在しなければならない」（*Life & Letters*, p.128）

現在知育偏重の弊害がいたる所で噴出している。また最近の外務省の不正行為や雪印、日本ハム、東京電力の企業倫理の欠如及びゲーム感覚の殺人事件を挙げるまでもなく、日本人は自己中心的になり、鋭いナイフで自他を傷つけている。

このテキストを使用する年間十万人の高校生が新島の倫理思想の一端から本格的に彼に関心を持ち、同志社で学びたいという受験生が出てくることを期待している。

井上勝也（大学文学部教授）



3 日本社会とキリスト教

キリスト者の文明開化

江戸時代においてキリスト教は、厳禁の宗教として長らく封印されてきたが、明治維新以後は多くの宣教師が来日し、教育や社会事業をとおして、文明の宗教として日本の社会に広まった。日本人のキリスト者は、どのようにして日本に貢献しようとしたのだろうか。

新島襄（1843～90）は幕末に国禁を犯してアメリカに渡り、1874（明治7）年に帰国し、翌年京都に同志社英学校を創設した。彼は、西洋の近代文明はキリスト教の道徳主義のうえに成立したものととらえた。「道徳上の主義」をともなわない文明の「知性」はよく切れるナイフと同じで、他人や自分自身をも傷つけると考えた彼は、新しい知識だけを重んじる教育が、日本の国民に普及することに大きな危機意識をいだいた。同志社に学んでキリスト者になった人のなかからは、日本銀行総裁の山室軍平（1872～1940）のように、貧民救済などの社会事業に生涯をささげた人々が多く世に出た。

日本の伝統とキリスト教

文明開化期には「文明の宗教」として理解されていたキリスト教も、やがて日本の伝統思想や宗教との間に、深い矛盾が存在するという問題に行きあたった。とくに、欧化主義の時代から伝統主義への回帰がとなえられた明治20年代になると、日本人であることと、キリスト教徒であることの自己矛盾に悩みながら、信仰を深めていく人々が登場した。

教会の組織や儀式にたよらず、『聖書』に書かれた「神からの使命」を重んじる無教会主義を主張した内村鑑三は、その代表的な人物であ

新島襄（1843～90）

安中藩（群馬県）の下級武士の長男に生まれる。1864（元治元）年に国禁を犯してアメリカに渡る。アマースト大学に学び、帰国して同志社英学校を創設。官憲筋から目立した「自治教会」と、信仰を尊重した「自由教育」をとなえ、キリスト教による「良心教育」を教育の基礎とした。

（群馬、安中教会蔵）

101

高等学校 倫理

第一学習社